オーバー・フェンス ―――― 菅原和博（函館シネマアイリス代表）

函館の地で、佐藤泰志の小説と出会い、衝撃を受け、勢い余って映画化を企て、市民による実行委員会を結成し、製作費のための募金活動を行い、「佐藤泰志の復権」を合言葉にみんなで本気で取り組んだら、1本の映画ができた。

2010年、「海炭市叙景」（熊切和嘉監督）はそうして完成した。公開でも全国のミニシアターの支配人さんが支援してくださった。絶版だった小説はすべて文庫化、佐藤泰志は復権をはたした。

3年後『そこのみにて光輝く』を作った。海外の映画祭にも参加させてもらい、賞までいただいた。今、こうして書いていても「本当か？」という気がしてならない。

佐藤泰志原作の3作目となる『オーバー・フェンス』は「ポジティブでウディ・アレンのような函館映画を作りたい」という発想から生まれた。前2作を観た観客を驚かせたかった。「この映画、佐藤泰志原作!?」と感じていただければ嬉しい。制作部、撮影部、照明部、録音部といったメインスタッフは3作ともにほぼ同じメンバー。函館のボランティア・スタッフにも3作ともに携わったスタッフが大勢いる。私は「海炭市組」と呼んでいた。

『オーバー・フェンス』は大人のラブ・ストーリーでもある。40男の本音の恋愛劇を見たかった。佐藤泰志と脚本家・高田亮さんが、がっぷり四つに組んだコラボともいえる。オダギリジョーさんは近寄り難いオーラを放つ俳優さんですが、実像はとても気さくで、撮影の合間には好きな音楽の話などした。蒼井優さんはホテルで初めて挨拶をした後、そばにあった古いアップライトピアノでドビュッシーの「月の光」の一節を弾きはじめた。ヒロイン・さとしがそこにいた。

山下監督はスタッフ・キャスト・函館の住民みんなに愛されていた。ハードな撮影にも関わらず現場が和やかな雰囲気だったのは、山下監督の人間性の成せる技。撮影の合間、近所のお婆さんとベンチに腰掛け、普通に話をしている姿がウディ・アレンのように見えた。

2017札幌国際芸術祭 CM映像制作ワークショップ参加者募集！

札幌国際芸術祭のCM映像（実写とアニメーション2種類）をプロの映像ディレクターやアニメーション作家と一緒に制作するワークショップが開催されます。音楽は芸術祭ゲストディレクターの大友良英さん。完成したCMは、来年5月ごろから芸術祭公式HPやネットで配信、シアターキノなどで上映される予定です。募集期間は8月8日（月）～9月12日（月）、詳細はインタークロスクリエイティブセンターのHPをご覧ください。

いつの時代も自分の才能一つで逆境を乗り越えてスターになることは、すべての人の変わらぬ夢。そして誰かが夢をかなえる姿をみることは、私たちに大きな希望と喜びを与えてくれる。そんな胸躍る実話に基づくサクセス・ストーリーが完成した。

でもこれはただの成功物語ではない。舞台は2005年、パレスチナのガザ地区。

繰り返される紛争のため、住民は地区から一歩も出ることを許されず、明日住む場所も食べる物も、命の保証もない厳しい毎日を送っている。この地で生まれ育った者が夢を実現するとしたら、それは世界を変えるということに他ならない。

"スター歌手になって世界を変える"―― まさにそれが、ムハンマド少年の夢だった。

拾ったガラクタで楽器を作り仲間や大好きな姉とバンドを組んで、最初は楽しく歌っていればいいと思っていた。だがムハンマドの声を信じ姉は「カイロのオペラハウスに出る！」というとんでもない目標をたてる…。

本作は、姉との約束を果たすため、紛争の地ガザを命がけで脱出し、世界的な歌手になる夢をかなえて、パレスチナの希望の星となった少年の感動の物語。

監督は「パラダイス・ナウ」「オマールの壁」のハニ・アブ・アサド。政治的な問題に真正面から迫る社会派作品で高く評価されてきましたが、今回はモデルになった実在の人物との出会いがきっかけで、美しく感動的な物語を描きたいと、新境地に挑みました。

ドサリと音を立てて、膨大な枚数の原稿がデスクに置かれた。1929年、ニューヨーク。スクリブナーズ出版社の編集者、マックス・パーキンズのもとに持ち込まれた小説だった――。

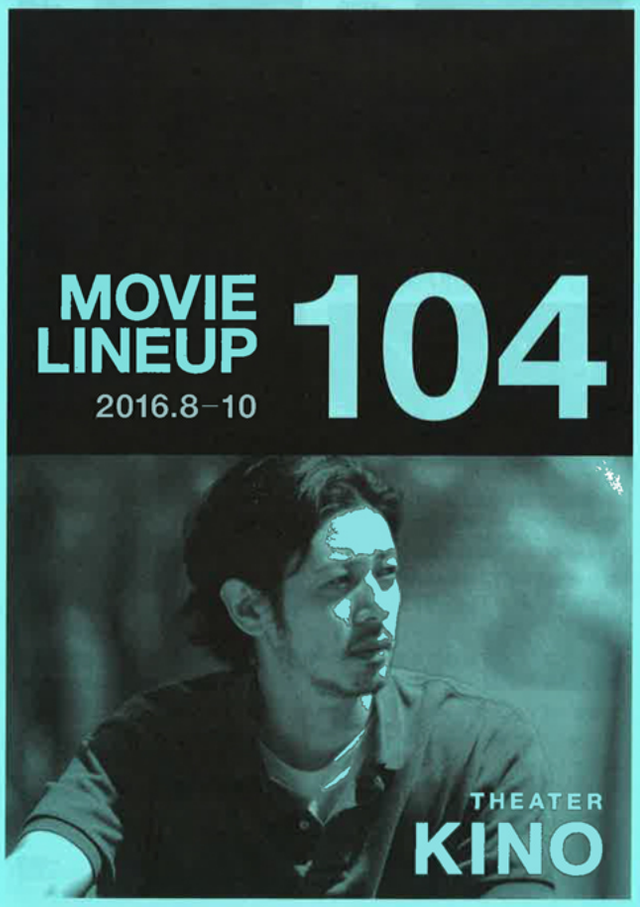
アメリカ文学史に残るベストセラーの誕生に隠された、実在の名編集者と天才作家、文学にすべてをかけた二人の友情を描く感動の実話。主演には演技派二人、コリン・ファースとジュード・ロウが初共演。

実在の人物、パーキンズとはいったいどんな人物だったのか？

「日はまた昇る」「老人と海」のノーベル賞作家アーネスト・ヘミングウェイと、「グレート・ギャツビー」のスコット・F・フィッツジェラルド、今では偉大な作家と称えられる二人を全く無名だった時代に見出し、会社の上層部の反対を押し切って出版したというカリスマ編集者。パーキンズは土に埋もれた原石を発掘し、的確な助言で磨き上げるだけでなく、悩める作家たちの人生の心優しい伴走者だったことでも知られている。

そんなパーキンズが、もっともその作品に感銘を受け、才能を信じた作家が、トマス・ウルフだった。1938年に37歳で亡くなるまで、アメリカでは大変な人気を博し、現在でも20世紀前半を代表する作家として愛され続けている。

本作では、ニューヨーク中の編集者に出版を断られたウルフの原稿を、パーキンズがいかにして輝ける傑作へと変貌させたかを描くとともに、そんな二人の友情の行方に迫る。



今号のごあいさつ

夏休みに入りましたがいかがお過ごしでしょうか。夏から秋にかけての号ができました。

人生に愛と情熱をかけた芸術家たち「ラスト・タンゴ」と「パコ・デ・ルシア 灼熱のギタリスト」、暑い夏にピッタリです。ヴェンダース製作総指揮、名曲の数々に乗せて踊る一流ダンサーたち、しかしそこにはマリアとファンの、タンゴでしか愛を確かめあえない哀しみと情熱が浮き彫りにされていきます。一方、フラメンコの地・アンダルシアから世界へ、神々しいまでのギターの演奏、孤独を愛し音楽探求に生涯をかけたパコの情熱の旋律に、東京公開の初日には場内から大きな拍手がわいたそうです。

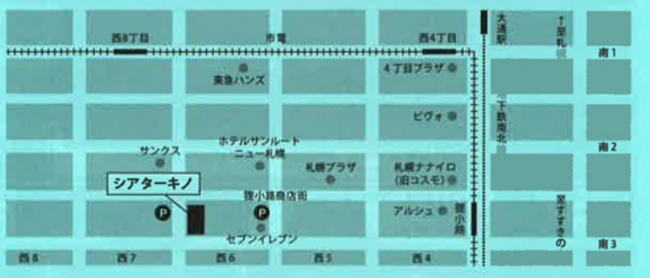
「男と女」「愛と哀しみのボレロ」のクロード・ルルーシュとフランシス・レイのコンビ復活！ 大人の愛の物語に、やさしい笑みで慈しむように人々の心をだきしめてくる、インドにはもう一人の主人公がいるようです。（これは見てのおたのしみ…）

「海炭市叙景」「そこのみにて光輝く」に続き佐藤泰志原作、函館3部作最終章「オーバー・フェンス」が遂に完成。さまよう心を抱えてようやくかすかな光のほうへと歩き出す姿に深い感動が待っています。素晴らしい作品になりました。

そしてあっと驚くような、こんな愛し方もあったのね、と心のつぶやきが聞こえてきそうです。母から家族へのおくりもの「湯を沸かすほどの熱い愛」。オリジナル脚本で劇場デビューの中野量太監督、大注目です。では、銭湯"幸の湯"でお待ちしています！

支配人　中島ひろみ

2016年度キノ会員募集中！（スタンダード会員・シニア会員・学生会員）
ご利用期間：2017年3月31日まで　締め切り：9月30日（金）まで延長！（ビンテージ会員は終了）



THEATER KINO
札幌市中央区狸小路6丁目南3条グランドビル2F
TEL 011 231 9355
www.theaterkino.net / webmaster@theaterkino.net